年間選者賞（平成二十七年七月号〜二十八年六月号）

宇都宮とよ選

野見山鈴子

（平成二十八年五月号）

スカイツリースポット私は持つてゐる井荻の線路を跨ぐ通路に
見はるかすスカイツリーのあのあたり言問橋も梅若塚も
みやこどり羽白く浮き都より日暮れ早からん冬の渡し場
涙して泣ける風流男の名を伝へ千年ふりたりよからうと消す
うせにけり業平橋の駅名も町名もまた転変のうち
向島・寺島・曳舟・柳島水辺の草花咲くと思ふも
景勝地なりし江戸期のありとして鮒釣る竿の巧緻なること

●作者の言葉

東京スカイツリーが完成してから何年かたちました。私の住む杉並区内の井荻駅の二階通路から、窓ガラス越しに遠望できるのを知ったのは、それよりかなり後のことです。線路の真上はずっと東のほうへ眺望をさえぎるものがありません。それを見ていると、伊勢物語の在原業平や、もう少し近い江戸時代の水辺の行楽地、それから現代のありようまで時間と空間の連想が次々と広がりました。楽しく作った上に、思いがけず賞までいただきこんなに嬉しいことはありません。本当にありがとうございました。

●選者の言葉

この作者に珍しく七首の連作。スカイツリーという釦を押すとぱっと明るむ野見山さんの世界がある。みずみずしい情感を伴って下町界隈の謂れのある地名、人名がつぎつぎに口をついて出て連鎖の紋様を描く。懐旧の情に溺れず一歩つきぬけているのは転変止むを得ぬという作者の知性による。釣竿に巧緻という一語を与えて江戸期の文化をどっと広げたあたり、うれしい言い回しであった。作者の今の住まいは東京の西、井荻。山の手の、武蔵野の雰囲気をまとった淡白な作品が多い。西武線の線路を跨ぐとき、ふと目に入る遠い東のスカイツリーは、あなたの生まれ育った下町はここぞと立っているのであった。野見山さんが川沿いと言えば川は大川であり隅田川なのだ。